迷惑かけたくない

支援の現場から(上)

身寄りなき社会

少子高齢化や未婚、核家族など社会構造の変化で、身近に頼れる親族がいない単身高齢者が増えている。2020年に約672万世帯だった1人暮らしの65歳以上の高齢者世帯数は、国の推計で50年に約1084万世帯に拡大。本県でも約23万世帯（20年比約9万世帯増）になる見通しだ。「おひとりさま」を巡る暮らしの中の課題や取り組みを取材した。

男性の部屋には緊急連絡先として「しんらいの会」の電話番号が貼られている。救急搬送などの場合は同会に連絡が行く＝取手市戸頭

死後の手続き託し安堵

■家族の形

土浦市内の会議室で5月、セミナーに約15人が集まった。病院のソーシャルワーカーらに交じって、白髪が目立ったり、手押し車を支えにしたりする高齢者が見られた。

セミナーは、身近に頼れる親族がいない単身高齢者を支援する一般社団法人「しんらいの会」（同市）が主催。本人を取り巻く課題や事業を紹介した。

「親族は（自分の世話を）やってくれない時代になった。家族の形が壊れてきている」

同会理事長の青木規幸さん(55)が「おひとりさま」を巡る問題を解説した。同会を2009年に立ち上げ、身寄りのない高齢者の会員は累計1400人を超える。うち約700人を見送り、葬儀も執り行った。

「高齢者等終身サポート事業」と呼ばれ、単身高齢者を支える担い手として存在感が増してきている。

セミナーに参加した牛久市の女性(74)は夫と2人暮らしで、子どもはいない。「親族がいても頼みづらい」とし、「いつ何があるか分からないので、サービスの内容を知りたかった」と胸の内を明かす。

高齢者等終身サポート事業　国はガイドラインで、①身元保証（入院や施設入所時の保証人など）②死後事務（死亡届提出や葬儀手配など）③日常生活支援（通院の付き添いなど）―の三つのサービスを全て提供すると規定している。総務省の実態調査によると、事業者は全国で約400あった。監督官庁がなく、サービスの追加料金や解約時の返金を巡るトラブルも目立つ。

■「恥ずかしい」

取手市の戸頭団地。未婚で1人暮らしの男性(74)は「独り者は恥ずかしい」と繰り返す。部屋の扉には、緊急連絡先として同会の電話番号が貼られていた。何か起きた場合、警察や消防からの問い合わせ先にしている。

東北地方の出身。高校卒業後、各地で工場勤務や林業で生計を立て、現在は年金暮らしだ。約10年間、親族とは連絡を取っていない。

今年2月、血管の病気が見つかって日帰り手術を受けた。自力で病院の手続きは済んだものの、「今後入院した際に見守ってくれる人はいるだろうか」と不安が募る。

ニュースで自分のようなおひとりさまの特集を見て、身元保証や孤独死、遺体の引き取りなどの問題も理解していた。病気をきっかけに、新聞記事で知った同会に入会した。200万円を預け、入院時の身元保証から死後の手続きまでを託した。

契約に先立ち、青木さんから重要事項の説明があり、医療に関する同意や墓地の意向を確認された。意識がない状態で医師が医療同意を求めた場合は、同会の判断で同意して構わない▽延命治療を希望しない▽墓地は希望しない―と意思を伝えた。

男性が亡くなると、同会所有の共同墓地に他の会員と一緒に合同納骨される。

契約書に印鑑を押すと、男性はほっとした表情を見せた。「自分の後始末で周りに迷惑をかけないで済む。安心を買ったようなものだ」

学びや、ツバメ子育て　常陸大宮

常陸大宮市東野の市立大宮北小（山本宏子校長）で、渡り鳥のコシアカツバメが子育てに励んでいる。児童の元気な声が響く学びやの軒下に、とっくりを半分に割ったような特徴的な形の巣が約20個並び、親鳥たちが上空をせわしなく飛び交っている。

日本野鳥の会茨城県によると、コシアカツバメは体長約18㌢で腰が赤茶色の夏鳥。4月末ごろに東南アジアから飛来し、子育てをして10月に帰る。

児童たちはツバメに関心を持ち、子育てを見守っている。5年生の鈴木恵茉さんは「ヒナが元気に育ってほしい」と話した。

（吉田雅宏）

校舎の軒下に巣を作り子育てするコシアカツバメ＝3日、常陸大宮市東野の市立大宮北小

父親殺害で長男起訴　水戸地検

水戸市内原町の住宅で6月、父親の首を絞めて殺害したとして、水戸地検は3日、殺人の罪で、同居する長男で無職、坂田武男容疑者(54)を水戸地裁に起訴した。

起訴状によると、坂田被告は同月12日午後6時50分ごろ、自宅で父寅夫さん(88)の首を背後から腕で絞めるなどして窒息死させた